

Ф.И. Чyтчeф 政治詩試訳(5)

大 矢 温

「Чyтчeф 政治詩試訳(1)~(4)」に引き続き、六巻本の全集をテキストにしてЧyтчeфの政治思想を解明する手がかりとなりそうな詩作の翻訳を試みる。

1) A. H. M.¹⁾

すばらしき虚構を信じず、
分別は、すべてを空虚にした
窮屈な法則によって
大気も、海も、陸をも征服し、
虜囚として——それらを赤裸にした；
それは、木に魂を吹き込み、
体なき者たちに体を与えた、
そんな生命を、底まで干からびさせた！……

あなた方はどこに、嗚呼、古代の諸民族よ！
あなた方の世界は全ての神々の聖堂だった、
あなた方は、**母なる自然**の書物を（原文大文字。以下同）
眼鏡無しではっきりと読んだ！……
いや、我々は古代の民族ではない！
我々の時代は、嗚呼友よ、そうではない。

嗚呼、学問の気苦勞の奴隷よ

それも自らの学によってがんじがらめの！
批判屋よ、お前はむなしく追い払うのか
彼らの黄金の羽の夢を；
信じよ — その体験自体が証となる、—
優しき妖精たちの魔法の宮殿を
そして楽しみの — 夢見を、
お前のみすぼらしいあばら屋で
現^{うつつ}に — 退屈に悩まされるよりは！……

1828年に雑誌『ロシアの観察者』に発表された際に添えられた日付から、1821年12月の作品とされている²⁾。チュツチェフが外務院に就職してペテルブルクに移ったのが1822年2月のことなので、この詩は彼のモスクワ時代の作品ということになる。チュツチェフとともにセミヨン・エゴロヴィッチ・ライチの元で学んだアンドレイ・ニコライヴィッチ・ムラヴィヨフに捧げたものと考えられている³⁾。自然との生き生きとした詩的な交わりを妨げる分別（理性）を批判し、古代にあこがれる、ローマン的なモチーフに満ちた作品である。チュツチェフの伝記を書いたピガリーヨフはこのようなローマン的なモチーフをライチの学士論文「教訓詩についての考察」と比較することによって彼の影響を指摘しているが⁴⁾、おそらくローマン主義は、チュツチェフやライチに限らず、当時、愛智会およびその周辺の若者の一般的な気風だったと思われる。

2) 1825年12月14日⁵⁾

専制はあなた方を放埒にし、
その剣はあなた方を打ち砕いた、—
そして厳正な公正さにおいて
法はその判決に副署した。
人々はその背信を厭い、

あなた方の名前を罵る —
そしてあなた方の記憶は後世のため、
地中に屍のごとくに、葬られた。

嗚呼、無分別な思想の犠牲者よ、
ひょっとして、あなた方は足りると思ったのか、
あなた方の乏しい血が、
永遠の極地を溶かすのに！
それはかろうじて燻り、煌めいた
何百年もの氷塊の上で、
鉄の冬が息を吹いた —
そして跡形さえも残らなかった。

「厳正」で「公正」な「法」と「放埒」あるいは「無分別」との対比である。上記の「1) A. H. M.」ではローマン的な立場から「理性」や「法則」の「窮屈さ」が否定されていたが、この詩では「放埒」は、「法」によって「打ち砕かれる。「無分別な思想」に駆られたデカブリストの蜂起は、「地中の屍」のように人々の記憶に残るかもしれないが、現実的には「跡形さえも残らなかった」と総括されているのである。

チュツチェフは上記の「A. H. M.」においては「自然」理解の方法として詩情（直感）と分別（理性）という二つの道を対比して、「理性」に対してはその詩情のなさを批判し、これを詩情の下に置いた。

他方、この詩においては、前二者に対して「自然」を無視することろから起きる「放埒」や「無分別」という観念が提示される。チュツチェフは理性の示す「自然」理解を「窮屈」なものと否定しながらも、「自然」の理解そのものを欠く「無分別」な「放埒」をさらにその下位に置くのである。

しかしこの詩においてデカブリストの「放埒」が否定されているからといって、けっしてニコライ一世の治世が肯定されているわけではない。一行目から

も明らかなように、デカブリストの「放埒」の原因は「専制」であった。チュッ
チェフにとってニコライの反動政治は「何百年もの氷塊」であり、「鉄の冬」で
あった。

1826 年後半の作とされている⁶⁾。

3) 日半ば⁷⁾

物憂げに息づく、霧立ちこめし日半ばが、
物憂げに川が滑り行く —
そして真っ赤な澄んだ天蓋に
物憂げに雲が溶けていく。

全ての自然を、霧のごとく、
暑きまどろみが包んでいる —
あの偉大なパン自身も今
ニンフの洞窟で安らかにまどろんでいる。

一般にチュッチェフは明暗、善悪といった、はっきりと区別できる二つの要素を対立させることによって思想を展開しているが、この詩においては、「日半ば」(полдень) にもかかわらず「霧が立ちこめ」、白い「雲」は「真っ赤な」「天蓋」に「溶けていく」。それらを隔てる境界は霧散し、溶解しているのだ。ここでは自然はその弁証法的活力を失い、カオスが支配している。それ故この詩においては「物憂げな」「まどろみ」が全てを覆っているのである。

この詩の最後でギリシア神話の牧神パンが登場している。40 年代の政論においてチュッチェフは東西ふたつのキリスト教を軸にヨーロッパの国際情勢を分析しているが、この詩においてチュッチェフの視線は、キリスト教よりもさらに深い歴史の古層へとさかのぼっている。上記の「1) A. H. M.」に描かれた古代の「諸民族」の信仰する「全ての神々」も同じ文脈で解釈することができる。

る。

1820年代末より以前に創作されたと見なされている⁸⁾。

4) ナポレオンの墓⁹⁾

春の魂によって自然は蘇った、
すべては厳かな平静の中で輝く：
紺碧の空、そして青い海、
しかも見事な霊廟、そして岸壁！
木々はぐるりを新しい花に覆われ、
それらの影は、一面の静寂の中で、
波の息吹によってわずかに揺れる
春にぬくもった大理石の上で……

久しく沈黙したか彼の勝利の^{ベルーン}雷神は、
そこからの轟きは、今も世界に残る……

……

……

人々の頭は、偉大な影のことで一杯だ、
が、彼の影は、荒れた岸で一人、
すべてに関心を失い、潮騒に耳を傾け
海鳥の叫びに興じている……

1829年の『ガラテヤ』に発表されているが、その後、改作が進み、1854年にほぼこのテキストになった¹⁰⁾。当初からこの詩は二聯構成で、一聯目はセント・ヘレナ島の墓の情景、二聯目はナポレオンについて語られている。

この詩のテーマになっているナポレオンの墓は、1840年にパリの廃兵院に移されているが、Чyтcheфがこの詩を作り始めた1820年代後半、ナポレオン

の墓はまだセント・ヘレナ島にあった。他方、チュツチェフがセント・ヘレナ島を訪れた記録はないので、ナポレオンの墓の情景は全てチュツチェフの創作とすることになる。

よく知られているように、40年代に入るとチュツチェフの関心はヨーロッパの国際政治に向けられた。特にクリミア戦争を契機にフランスとロシアとの関係を考察するに当たって、彼の関心がナポレオンへと向かい、ここから20年代の詩にふたたび手を加えたと考えるのが自然である。二聯目において、「人々の頭は、偉大な影のことで一杯だ」と詠うのも、フランスにおける英雄待望の風潮をふまえてのことである。

上記の「日半ば」ではギリシア神話の牧神パンが登場していたが、ここではキリスト教以前の異教ルーシの神ペルーンが登場している。すでに述べたように、チュツチェフにとって「神」とはキリスト教の神だけではないのだ。

5) 手段と目的¹¹⁾

あなたから、栄光の冠^{かんむり}を受けようとは思いません、
が、あなたのお褒めは好みます、
私の道中にそれに出会うなら。

*

バラストは指示しません、
船をどこへ、どのように航行するか、
でも、それは船の航行を容易にするのです。

仕事での栄達を求めず、自分の道を行く、あるいは、船のお荷物であるはずのバラストがかえって船の航行を助けることを指摘して無用の用を説くなど、仕事に対するさめた態度が伺える。

1829年10月31日付で検閲の許可が下りているので、それ以前の作品と言うことになる。ちょうど検閲を通ったこの日にチュツチェフは九等文官に昇進し

ているので、自らの昇進がこの詩の動機になっているのかもしれない。

6) 放浪者¹²⁾

ゼウスは愛でる、貧しき放浪者を、
彼の上にはその聖なる覆いが！……
家庭からの追放者は、
善き神々の客人となった！……

このすばらしい世界は、彼らの手ずからの産物は、
己が多様性を伴いて、
彼の前に展開し、横たわる
癒しとして、効用として、訓戒として……

邑、町、そして野原を横切り、
道は光に満ちて、這っている、——
彼に全ての**大地**が開かれる ——
彼は全てを見、**神**を讃える！……

人間社会に「家庭」という絆を持たない放浪者は、直接、神の創造物たる自然と交わる。神の聖なる庇護のもと、放浪者は大地をさすらい、神を讃えるのだ。ただし、ここで彼が「讃える」「神」とはキリスト教の神ではなく、古代ギリシア神話の神々である。

1830年代の前半、1836年よりも前の作と見なされている¹³⁾。

7) 狂気¹⁴⁾

焦げた**大地**と天蓋が

煙のごとく、溶け合うところ、—
陽気な気苦勞知らずの中に
痛ましき狂気が宿るところ……

灼熱の光線のもと、
炎の砂地に潜り込み、
それはガラスの瞳で
雲の中に何かを探す……

それは突然飛び上がり、敏感な耳を
ひびだらけの**大地**に押しつけて、
貪欲な聴力で何かを聞く
額に秘めたる満足をもって……

そして思う、流れの泡立ちが聞こえたと、
地下の**水**の奔流が聞こえたと、
それらの揺籃の歌声が、
大地からの騒がしい出立が！……

「3) 日半ば」のテーマにもなったカオスの状況である。「大地と天蓋」という、本来対立するべき自然の要素が区別なく「溶け合うところ」には自然の秩序がない。このような無秩序の状態では規則という「気苦勞」が無い代わりに、「痛ましい狂気が宿る」のだ、とチュッチェフは詠う。しかしこの詩におけるカオスは「日半ば」の沈滞した静けさではない。むしろ、灼熱の砂漠に地下水の噴出を予感させる、「嵐の前の静けさ」なのである。しかも「狂気」はすでにこれを「秘めたる満足をもって」察知している、と言う。

1830年の作とされている¹⁵⁾。この年は、フランスの7月革命や11月のポーランド蜂起に見られるように、表面上はヨーロッパの秩序を維持してきたウィー

ン体制にほころびが見られる年となった。とすれば、「狂気」とは、非理性的という点から、「2) 1825年12月14日」の「放埒にした」と言う表現に通じる概念であり、具体的には革命の謂いであることが分かる。とすればここでチュツチェフは、反動政治によって表面上は平静なヨーロッパ社会の奥底に「狂気」= 革命が待ち望む「大地」変動のエネルギーを見ていることになる。

8) キケロ¹⁶⁾

ローマの雄弁家が語った
内乱と動揺の中で：
「私は遅く起きた——そして夜に
ローマへの道中、捕らえられた！」¹⁷⁾
そう！……ローマの栄光に別れを告げながら、
カピトリアの高台から
お前は見た、血まみれの
その壮大な星の没するを！……

幸いなるかな、その宿命的な瞬間に
この世を訪れるものは——
至善者たちは彼を
宴の話し相手として呼び寄せた。
彼は彼らの荘厳な光景の観察者、
彼は彼らの仲間に入れられた——
そして生きながらにして、天上人のように、
彼らの杯から阿伽陀^{あかだ}を飲んだ¹⁸⁾！

異説はあるが、1829年7月から1830年9月の作とされている¹⁹⁾。上述の「7) 狂気」とほぼ時を同じくして、つまり永年ヨーロッパを支配してきたウィーン

体制が動揺を見せる中で、書かれたことになる。キケロはフランス大革命以来、民主主義や共和制のシンボルと見なされてきたが、そのキケロをチュツチェフは「幸いかな」と詠い「阿伽陀を飲んだ」として神々に列する。これはチュツチェフがキケロの奉ずる共和制に共感した、と言う意味ではない。共和制ローマの滅亡という歴史的事件に立ち会い、それを記録に残した、と言う意味でキケロはチュツチェフにとって、至福者であり、神々の宴の語り部となったのである。

ここでチュツチェフはヨーロッパに迫り来る歴史的な大変動を予見し、キケロに仮託して歴史的瞬間に立ち会う自分の姿を夢想しているのだ。

9) Mal'aria²⁰⁾

この神の怒りが好きだ。我、人知れずそを愛す
すべての中には、あふれかえる、秘められた悪がある —
花の中にも、ガラスのごとく透き通った泉の中にも、
虹色の光線の中にも、ローマの空自体にも。
すべては高く、雲なき天蓋のごとし、
すべてはお前の胸のごとく、軽く、甘く息づいている —
すべては暖かい風のごとし、木々の梢を揺っている —
すべては薔薇の香りのごとし、そしてそれら全ては死なのだ！……

いづくんぞ知らん、あるいは、自然の中には音、
香気、色そして声、
我々にとっての最期の時の先触れや
我々の最後の苦しみの癒しがあるを —
そして宿命的な運命の女神の使者は、
地上の息子たちをこの世から呼び出す時、
軽き布のように、それらによって自らの姿を隠す、

そう、自らの恐るべき到着を隠すのだ！……

1829年6月から7月にかけてチュッチェフは兄のニコライとともにイタリアに旅行しているので、この詩もその旅行との関わりで解釈すべきである。19世紀中葉までイタリアではマラリアがしばしば流行しており、これからイタリアに赴こうとするチュッチェフにとってもこの恐ろしい疫病は重大な関心事だったに違いない。

ところがチュッチェフはこの恐ろしい疫病を「好きだ」といい、「我、人知れずそを愛す」とまで詠い放つ。チュッチェフにとって、「死」という「悪」は音、香気、色、声といった「善きもの」と同様に自然に組み込まれた、自然を構成する要素であるのみならず、むしろ「善きもの」は「死」という「悪」の上に「軽き布のように」かぶさっているに過ぎない。あくまでも「死」、「悪」が本質なのである。泉や花といった美しきものの根底には「悪」が潜み、ローマの空も「悪しき空気」(マル・アリア)が覆っているのである。

10) Problème²¹⁾

山から転げて、石は谷間に横たわった —
どのように落ちたのか？ 今では誰も知りほしない —
自分で頂上から転げ落ちたのか、
それとも 他人の意志で覆されたのか！……
百年また百年が過ぎ去った、
いまだに誰もこの問題を解決していない……

谷底に転がっている石に対する一見素朴な疑問がテーマになっているが、題名がフランス語で表記されている点、「他人」が強調されている点、そして1833年1月という創作時期に着目すると、この詩においてチュッチェフは「石」に託して権力の転覆＝革命の問題を論じている可能性も排除できない。

11) 無題²²⁾

ルーテル教徒の礼拝が好きだ、
厳格で重々しく、そして簡素な彼らの儀式が——
その飾り気のない壁の、その空虚な建物の
高い教えが私には分かる。

見えないのか？ 旅の用意をしたあとで、
最後に信仰はあなたの前に立ち現れる：
それはまだ敷居を超えていないが、
その家はすでに空虚に、飾り気なく立っている、——

それはまだ敷居を超えていない、
まだその後ろで扉は閉じていない……
しかし時は来た、時を打った……神に祈り給え、
今、最後にあなたは祈る。

1834年の作とされている²³⁾。何を契機にこの詩を書いたかは不明だが、最初の妻エレオノーラがルーテル派プロテスタントの家系だったので²⁴⁾、妻の近親者の臨終に立ち会った可能性もある。イコンやフレスコ画で覆われたロシア正教の寺院を見慣れたチュツチェフの目に、ルーテル派の教会が「飾り気」無く、「空虚」に見えた様子がうかがえる。

40年代の一連の政論においてチュツチェフは西のキリスト教、特にローマカトリックに対して仮借無い批判を展開しているが、同じ西のキリスト教でもローマに反抗したプロテスタントやチェコのス派に対しては同情的な姿勢を示している。この詩においてもチュツチェフはルーテル派の教義に対して「私には分かる」と理解を示し、ルーテル教徒の「あなた」に対しては「神に祈り

なさい」と諭している。西のキリスト教徒でも神への祈りが通じるのである²⁵⁾。

12) 無題²⁶⁾

なんと甘美にまどろんでいることか、深緑の庭は、
青い夜の陶醉に抱かれて、
花で真っ白になったリンゴの脇で、
なんと甘美に輝いていることか、黄金色の月は²⁷⁾！……

創造の最初の日のように神秘的に、
無底の空に無数の星が光る²⁸⁾、
遠き調べの詠嘆が聞こえ、
隣の泉がより聞こえるように語る……

昼の世界にとぼりが降りた、
活動は力尽き、労働は眠りについた……
眠れる町の上、森の梢でも、
この世ならざる夜毎の轟きが目を覚ました……

それはどこから、その不可解な轟きは？……
夢によって解放された、死者の思いの、
霊的な、聞こえども、不可視の世界は、
今、夜の**カオス**の中にわき起こるのか？……

上述の「3) 日半ば」と同様に「カオス」の情景を詠った詩である。「日半ば」が真昼のカオスであるのに対して、この詩は夜のカオスをテーマにしている。「日半ば」においては霧の中であらゆるものが輪郭を失ったのに対して、この詩では夜のとぼりの中に「聞こえども、不可視の世界」が広がっている。いずれ

の作品においても、カオスとは「眠り」が支配する世界として描かれている。

「黄金色の月」を光源にして色彩あふれる第一聯に続いて、第二聯では光源は一層弱々しい星の光となり、視覚より聴覚が周囲を包む。後半第三聯からは夜のとぼりが落ちてカオスの世界が展開している。

「死者の思い」、「霊的な」など、来世を前提とした用語が使用されているが、この詩が作られたのは30年代前半のこととされるので²⁹⁾、50年代前半にチュツチェフが熱中したスピリチズムとの関係は否定できる。

13) 無題³⁰⁾

草原からトビが上った、
空へと高く舞い上がった；
より高く、より遠く、彼は捲き上がる——
そしてそれは、地平線の彼方に去った。

母なる自然は彼に与えた
二つの力強く、二つの生きた翼を——
が、私はここで、汗だくでほこりにまみれている、
私、大地のツァーリは、大地に生え付いていた！……

この詩において「母なる自然は」トビに「力強く」「生きた翼」を与えたが、「大地のツァーリ」たる人間は大地にへばりつき「汗だくでほこりにまみれている」。自然は人間の主観的な意図を離れて、独自の意志に基づいて作用するのである。

1830年代の作とされている³¹⁾。

14) 無題³²⁾

あなたが思っているものではないのだ、自然は：
石膏像ではないのだ、魂のない輪郭ではないのだ……
その中には魂があり、その中には自由があるのだ、
その中には愛があり、その中には言葉があるのだ……

4行空行

あなたは見る、木の葉と花を：
あるいは、それらを庭師が貼り付けたのか？
あるいは、母の胎内で胎児は成熟するのか
外的な、他の力の悪戯によって？

4行空行

彼らは見ないし、聴きもしない、
この世の中で、闇の中のように生きている！
彼らにとって、恒星たちは呼吸しないし
海の波にも生命はないようだ！

彼らの魂に光線は差し込まなかった、
彼らの胸に春は咲き誇らなかった、
彼らの前で森は語らず
星の夜は押し黙った！

この世ならざる言葉によって、

川と森を揺るがしながら、
夜、雷雨は彼らと相談しなかった
親しげな集まりにて！

彼らの罪ではない：捕らえておくれ、できるなら、
聾啞の器官の生命を！
嗚呼、その中では魂を揺さぶらない
自身の母の声もまた！

全8聯から構成されているが、第2聯目と第4聯目が空白のままになっている。1836年の『同時代人』に掲載されているので、それ以前の作と言うことになる。

すでに見てきたように、チュッチェフにおいて自然は独自の意志、力学によって動く。しかし、自然の意志を理解するものは少ない。世人（「彼ら」）には自然の言葉が通じない。母なる自然の言葉も「彼ら」の「聾啞の器官」には届かないのだ。

15) 昼と夜³³⁾

精霊たちの神秘的な世界に、
その名もない無底の上に³⁴⁾、
金糸刺繍の覆いが投げかけられた
神々の気高き意志によって。
昼は — その輝く覆い —
昼は、地上に生まれたもののよみがえり、
病める魂の癒し、
人々と神々の友！

しかし日は暮れる — 夜になった；
宿命的な世界から来た夜が、
天恵の覆いの布を
破り、脇へ投げ捨てる……
そしてその無底は、我々に晒される
その恐怖と闇とともに、
その上我等とそれとの間に仕切はない —
それ故我等にとって夜は恐ろしい！

昼と夜との対比である。ただし、ここではソロヴィヨフが指摘するように、夜が「覆い」なのではなく、昼が夜の上に「投げかけられた」「覆い」とされている。あくまでも夜が主であり、昼はその従者にすぎない。万物の輪郭が見え、それゆえ自然の活力たる弁証法が働く昼に対して、夜は輪郭のない、それ故、「名もない無底」であるにもかかわらず、チュツチェフは夜のカオスを「世界精神の最深の本質にして全宇宙の基礎」と考える³⁵⁾。「7) 狂気」におけるカオスが地中の「水」の「噴出」を内包しているのと同様に、この詩においては夜のカオスから昼のコスモスが生まれるのである。

しかし、夜に包まれることによって「我々」は輪郭を失い、「仕切」は無くなる。つまり夜のカオスの中に同一化するのだ。換言すれば、「我々」という自我、「我々」という存在が無くなるわけである。「だから我等にとって夜は恐ろしい」。1831-1839年の作とされている³⁶⁾。

16) コロンブス³⁷⁾

汝に、コロンブスよ、汝に栄光の冠を！
大地の見取り図を汝、勇ましく作り上げ
天地創造の未完の仕事を
ついに仕上げ、

汝は神の手によってベールを捨て去った —
未知の、思いがけない新世界をば、
霧の無境界性から
汝は従え、神の世界へと引き出した。

このように古から結びつけられ、親しくなった
血族の結合によって
人間の理性の権化は
自然の生きた力と……
それが秘密の言葉を語るなら —
新世界をもって自然は
いつでも応える用意がある
その親族の声に。

上述の「1) A. H. M.」においては、自然 (природа) と人間との生きた交わりを妨げるとして詩情 (直感) の下位に置かれた理性がここでは「自然 (естественно) の生きた力と」「結びつけられ、親しくなった」とされている。「霧の無境界性」というカオスから「新世界」を「引き出」すことによって、「理性の権化」は「天地創造」という「未完の仕事」を「仕上げ」、それによって自然と一体化するのである。この詩においてもカオスから世界が生まれている。

1844年の作とされている³⁸⁾。

17) 無題³⁹⁾

知らないのかい、何が人間の英知にとって慶こばしいか：
あるいはそれはドイツ統一のバベルの塔か —
あるいはそれはフランスの狼藉の
共和的な巧妙な制度か？……

1848年の革命的動乱に呼応して書かれたと考えられている⁴⁰⁾。短い詩なので深い内容はないが、ここからЧyтчeфのドイツの統一やフランスの共和制に対する否定的な態度が読みとれる。

18) 無題⁴¹⁾

聖なる夜が地平線に上った、
喜ばしい昼を、愛しい昼を
まるで金色の覆いのように、それは巻き上げた、
無底の上に羽織らされた覆いのように。
そして、幻のように、外見の世界は去った……
そして人間は、家のない孤児のように、
弱々しく裸で、今立っている
闇の深淵を目前にして。

彼は彼自身に委ねられる —
智は消え、思想はその親を失った —
自らの魂の中に、無底の中のよう、彼は沈められた、
そして外からの支えもなければ、境界もない……
今彼には、遠く過ぎ去った夢のように思える
全て明るく、生き生きしたものが……
縁のない、判じがたい、夜のものの中で
彼は親族の遺産を知る。

上述の「15) 昼と夜」と同様に、この詩においても昼は夜を覆う「金色の覆い」に過ぎない。夜という「無底」のカオスの上に「黄金の覆いのように」昼は「羽織らされて」いるのだ。「外見の世界」たる昼は去り、万物が輪郭を失う「境界もない」夜のカオスが「地平線に上がった」のである。無底のカオスを前

に人は、すでに「昼と夜」で見てきたように恐怖し、頼るよすがもなく立ちつくすのである。しかもこれは太古からの自然の営みなのだ。

1840年代末から50年代始めの作と考えられている⁴²⁾。

注

- 1) *Тютчев, Ф. И.* “А. Н. М.” // Полное собрание сочинений и письма в шести томах (далее “Тютчев”). М., 2003. Т. 1. С. 31.
- 2) См. Комментария. Там же. С. 289.
- 3) *Кузина, Л. Н.* и *Пигарев, К. В.* Комментария // Ф. И. Тютчев: Сочинения в двух томах. М., 1984. Т. 2. С. 354.
- 4) *Пигарев, К. В.* Жизнь и творчество Ф. И. Тютчева. М., 1962. С. 203-204.
- 5) *Тютчев.* “14-ое декабря 1825” // Тютчев. Т. 1. С. 56.
- 6) См. Комментария. Там же. С. 313.
- 7) *Тютчев.* “Полдень”. Там же. С. 66.
- 8) См. Комментария. Там же. С. 327.
- 9) *Тютчев.* “Могила Наполеона”. Там же. С. 67.
- 10) См. Комментария. Там же. С. 328.
- 11) *Тютчев.* “Средство и цель”. Там же. С. 98.
- 12) *Он же.* “Странник”. Там же. С. 118.
- 13) См. Комментария. Там же. С. 371.
- 14) *Тютчев.* “Безумие”. Там же. С. 120.
- 15) См. Комментария. Там же. С. 374.
- 16) *Тютчев.* “Цицерон”. Там же. С. 122.
- 17)ここに引用されたキケロの言葉は、『ブルータス、あるいは有名な雄弁家について』が出典とされている。См. *Белов А. А., Орехов Б. В.* “Кровавый закат звезды римской славы”: о возможной связи текстов

Ф. И. Тютчева и Цицерона [Электронный документ] // Электронный вестник Центра переподготовки и повышения квалификации по филологии и лингвострановедению. —2006. —Вып. 3. С. 2. [<http://www.evcrppk.ru/files/pdf/98.pdf>]

- 18) 原語は бессмертье。文字通り読めば不死の妙薬を飲んだことになるが、文脈からすれば不朽の名声を得た、と解釈すべきである。
- 19) См. Комментария. Тютчев. Т. 1. С. 378.
- 20) *Тютчев*. “Mal’aria”. Там же. С. 130.
- 21) *Он же*. “Problème”. Там же. С. 150.
- 22) *Он же*. “***”(Я лютеран люблю...)”. Там же. С. 156.
- 23) См. Комментария. Там же. С. 432.
- 24) См. *Чагин, Г. В.* Федор Тютчев. Женщины в его жизни и творчестве. Изд. «Урал LTD», 1999. С. 19.
- 25) 政論「ローマ問題」においてもチュツチェフは、東西両教会の合同の可能性に言及した箇所、ローマも普遍教会の伝統を継承していることを認めている。См. *Тютчев*. “La question Romaine”. Тютчев. Т. 3. С. 73.
- 26) *Он же*. “***”(Как сладко дремлет сад...)”. Тютчев. Т. 1. С. 158.
- 27) 後に象徴主義詩人のベールイは、プーシキンの詩作との比較において、チュツチェフにおいては女性名詞の луна ではなく、男性名詞の месяц が使われている点に注目している。См. *Белый, А.* Поэзия и слова // Семиотика: антология. М., 2001. С. 481.
- 28) Шерингの同一哲学に主客、精神と存在といった対立を持たない「無底 Ungrund」という概念がある。チュツチェフへの影響という点に関しては、1827年にミュンヘン大学の教授に就任したШерингとチュツチェフとの間には個人的な交流があったにもかかわらず従来あまり重要視されてこなかった。См. напр., *Козырев, Б. М.* Письма о Тютчеве // Литературное наследство. М., 1988. Т. 97, кн. 2. С. 104-105. そのためか2002年のアカデミー版全集においてもチュツチェフに対するШер

ングの思想的影響について重要視されていなかった。全集に寄せた書評においてバラキンはその重要性を指摘したのはそのためだった。См. Балакин, А. Рецензия: Первый том академического Тютчева // Новый мир. М., 2004. № 5. С. 180. これに対しては、全集の編集者の側からの反論もある。См. Тарасов, Б. Н. Историософия Ф. И. Тютчева с современным контексте. М., 2006. С. 17-18. しかしながら、タラソフ自身、チュツチェフとチャアダーエフとの関係を分析する際にチュツチェフとシェリングとの交友関係に言及しながらも思想的影響については立ち入ってこなかった。См. Тарасов, Б. Н. Ф. И. Тютчев и П. Я. Чаадаев // Тютчев сегодня. М., 1995. С. 99-100. なお、ロシア文学に対するシェリングの影響については、坂庭氏の一連の研究がある。坂庭淳史「チュツチェフ『デニーシエヴァ・シリーズ』における合一の変奏」『ロシア語ロシア文学研究』No.32、同「ロシア詩によるシェリング哲学の受容—愛智会からチュツチェフへ」『比較文学』2001、Vol.44、同「プラトンと愛智会、シェリング—ヴェネヴィーチノフの詩人像を中心に（プラトンとロシア(2)）」『北海道大学スラブ研究センター「スラヴ・ユーラシア学の構築」研究報告集』2007、No.20。

- 29) См. Комментария. Тютчев. Т. 1. С. 435.
- 30) Тютчев. “*** (С поляны коршун поднялся...)”. Там же. С. 161.
- 31) См. Комментария. Там же. С. 440.
- 32) Тютчев. “*** (Не то, что мните вы...)”. Там же. С. 169-170.
- 33) Он же. “День и ночь”. Там же. С. 185.
- 34) 「無底」については上記「12) 無題」の注 27 を参照。
- 35) Соловьев, В. С. Поэзия Ф. И. Тютчева // Собрание сочинений В. С. Соловьева С-Пб (Фототипическое издание. Брюссель, 1966). Т. 7. С. 126.
- 36) См. Комментария. Тютчев. Т. 1. С. 468.
- 37) Тютчев. “Колумб”. Там же. С. 194.

- 38) См. Комментария. Там же. С. 482.
- 39) *Тютчев*. “***”(Не знаешь, что...)”. Там же. С. 199.
- 40) См. Комментария. Там же. С. 486-487.
- 41) *Тютчев*. “***”(Святая ночь на небосклон взошла...)”. Там же. С. 215.
- 42) См. Комментария. Там же. С. 505.